



文化も教育も

河合文化教育研究所

河合塾の付属研究機関
河合文化教育研究所は、
河合塾講師と研究者・
学者を研究員に擁し、
18歳前後の若い人た
ちに〈知〉の現場を提
供すること、教育現場
と第一線の研究活動を
繋げることを目標に活
動しています。

文教研の

榮

しおり

2015.夏
発行・編集
河合文化教育研究所

■河合塾独自の研究所

予備校にはやや異質な感じがする研究所という名称を持つ「河合文化教育研究所」（通称「文教研」）について紹介します。

他の予備校にはない河合塾独自のこの研究所は、河合塾で学ぶみなさんに、単に受験勉強だけでなく、もつと広く外の世界にも眼を向けてほしい、同時に自分の内面を掘り下げて隠れた可能性を見出してほしい、そのための知的刺激を提供したい、という想いのもとに作られたものです。みなさんが存分に自分の感受性と思考力をはぐくむことが、結果として受験への足腰をも鍛えるとの強い確信があつてのことです。

一方で、文教研は、予備校の中の研究所という特別な場所に、大学にはない新鮮な意味を汲み取って集まってくださった先生方に、主任研究員としてお越しいただいています。一貫して独自の姿勢に徹してきた学者や思想家の方々です。この主任研究員の存在が、文教研に文化的・学問的興行きを与えているのです。画期的発想と実行力で河合塾の文化活動を牽引し、河合文化教育研究所の基盤作りをした特別研究員もいます。

現在28ある研究会は、研究員が河合塾講師をつとめながら一人ひとりのそれぞれのこだわりのテーマを探究し、その結果をみなさんに還元しようと活動しています。みなさんが受験勉強と格闘しながら成長している予備校の教育現場と現在の学問研究の最先端とのあいだに生き生きとした往復運動があるところに、ほかの予備校にはない文教研の独自性があります。

■文教研がやっていること

文教研ではさまざまな多くの国際シンポジウムを行ってきました。日仏シンポジウム「青年の現在」を皮切りに、日独シンポ「日独文学者の出会い」、北京大学との10年にわたる日中共同学術討論会「アジアの歴史と近代」、さらに日本のセンター試験と中国・韓

国の大学統一入試問題を三カ国語に翻訳し、三カ国の受験生にそれぞれ解いてもらって互いに議論した「日・中・韓の大学入試統一試験を社会的・文化的に比較分析する」という衛星放送での国際シンポジウムなど挙げられます。

そのほかにも、わが国初の精神医学者と哲学者合同の「河合臨床哲学シンポジウム」をはじめとして、公開講座、文化講演会を各地で開催するなど、文教研でしかできない独自の活動を行っています。

河合ブックレットや学術書の出版、読書案内「わたしが選んだこの一冊」の制作などの出版活動もしています。

■文教研のめざすもの

〈3・11〉における近代科学の象徴としての福島第一原発の爆発事故以後、近代の諸価値と原理がいっそう丁寧に考え直されなければならなくなっています。文教研では、こうした大きな問題をも受けとめて、みなさんと考えていきたいと思っています。

また、戦後70年という今年、東アジアの近代の歴史問題がせりあがつてきたなか、中国や韓国の研究者や若い人々と歴史や教育問題を互いに語りあい、相互理解を深めることを通して、近代の国民国家を超えた東アジアの公共空間をどう創るかということをも考えていきたいと思っています。

これらの活動を通して、さまざまなほころびが出てきた近代科学や近代教育の枠組みそのものを、文教研ではみなさんと一緒にもう一度根底的に問い直そうとしています。この「文教研の榮」は、こうした文教研の願いと意図と活動を塾生のみなさんに紹介するために発行するものです。

ホームページのご案内

文教研のホームページに、創設以来30年の歴史における主任研究員・特別研究員の紹介、活動の記録、出版物の詳細などを掲載しています。

そのほか、毎年多く大学入試に出題される主任研究員の著作をリストアップしました。

最新情報を更新していますので、ぜひご訪問ください。

<http://bunkyoken.kawai-juku.ac.jp/>



◆研究会紹介◆

河合文化教育研究所の研究会は河合塾講師らが構成員で、現在28の研究会がそれぞれ独自の活動をしており、河合塾生にその成果を活かそうとしています。

- 映画研究会
- エンターテインメント・メディア研究会
- 学習デザイン研究会
- カブリ・ジオメトリ研究会
- 漢文訓読研究会
- 教育方法研究会
- 経済研究会
- 現代史研究会
- 現代社会と教育研究会

研究会

- 高等教育研究会
- 国語教育の再構築研究会
- 差別問題研究会
- 女性論・男性論研究会
- 初等教育研究会
- 心身論研究会
- 身体表現教育研究会
- 生物学セミナー
- 世界史研究会
- 大学基礎準備教育研究会

- 地域言語研究会
- ドストエフスキイ研究会
- 内藤湖南研究会
- 20世紀国際政治史研究会
- 日韓文化交流研究会
- 日本近代・思想史研究会
- 認知と記号研究会
- 東アジアの歴史と現代研究会
- 廣松渉研究会

わたしの浪人時代



私も浪人した。今を去ること半世紀も昔だ。そして河合塾に通った。挙母町（現豊田市）から名鉄三河線の知立で乗換え、金山で降り、チンチン電車の市電に乗って桜山で降りる。河合塾の校舎はいままでこそ日本中に数十箇所もあるが、当時は木造の桜山校しかなかったのだ。家を出て片道一時間半かかった。

当時大学短大の定員は約20万人、志願者は約50万人で大学の門は狭かった。当時日本は高度経済成長期の直前で、貧乏国時代であった。それだけに浪人するなどということは、最大の親不孝であり、浪人は強い「日陰者意識」を胸に抱えていた。最寄の駅から予備校までの道は、不思議に全国共通して「親不孝通り」とよばれた。それだけに浪人生の心意気にも切羽詰ったものがあつた。四当五落などという言葉が流行った。一日五時間の睡眠では合格しないぞ、四時間睡眠でやっとなぞ、という意味である。

そんなわけで予備校へ入ればがんばりが、めの大学入試問題づくしと覚悟していたが、その思惑ははずれた。高校の授業よりも余裕があり、面白いのである。

英語講読は塾生の河合逸治先生の担当であつた。教材はバイロンの「チャイルド・ハロルドの巡礼」であつた。擬古文でしかも詩文ときている。これは難物だと身構えたが、講義の身は格調高く、英文学の魅力にあふれた内容であつた。河合逸治先生は英文学者であつたのだ。バイロンは一学期中続いた。

国語は、教材は与謝蕪村であつた。「春風馬堤曲」をはじめ

愁ひつつ丘に登れば花萩（はなはぎ）

などの詩句であつた。

蕪村は江戸時代の人であるが、「春風馬堤曲」などは現代詩かと思わせるような身近さを感じさせるものであり、一驚した。蕪村も一学期中続いた。

夢のような河合塾での一学期は終った。夏休み、郷里の挙母に東京のS予備校に行っていた友人たちが帰ってきた。予備校の教科書を見せ合つた。友人たちは「お前何をのんびりやってるんだ」といった。S予備校の教科書を見ると大学入試問題の羅列であつた。問題の最後に「XX年度YY大学出題」とあるのが眩しかった。しまったと思つた。二期は東京に下宿してS予備校にかよつた。

それから半世紀が経つた。いまS予備校の教科書は頭の中からきれいに消えている。しかしバイロンや蕪村は一部暗誦できるほど心身の一部となつて残っている。

●プロフィール

丹羽 健夫（にわ・たけお）

文教研主任研究員

名古屋大学経済学部卒。

中西学園理事。

元名古屋外国語大学客員教授。

1967年より河合塾勤務。以来一貫してカリキュラム作成、生徒指導、教員確保、生徒募集に従事。進学教育本部長、理事として河合塾のみならず、日本の予備校教育の責任を担い、著作活動やシンポジウムなどを実施し、そこで発言をしてきた。現在は中等・高等教育問題等の出稿、高等学校・大学での講演等をこなし、教育の現場から制度まで教育全般について幅広くメッセージの発信を続ける。現在「日本人の留学」を執筆中で、留学の隆盛の歴史的時期について思索中。

また、河合塾教育情報部編集の高校の先生向け情報誌「ガイドライン」書評コラム「教育を読む」に執筆をしている。昨年は『羊の宇宙』『郷愁の詩人と謝蕪村』『鹿鳴館の貴婦人』『大山捨松』『漱石の思いで』『怪人二十面相』など。いずれも河合塾教育情報部のホームページで読むことができる。

著書：『愛知の寺子屋』『予備校が教育を救う』『悪問だらけの大学入試』『眠られぬ受験生のために』『親と子の大学入試』（共著）『星の王子・王女たちの留学物語』（監修）ほか

丹羽 健夫

主任研究員・特別研究員紹介「このごろ思うこと」

◎木村 敏 主任研究員

◎丹羽健夫 主任研究員

◎中川久定 主任研究員

◎渡辺京二 主任研究員

◎長野 敬 主任研究員

◎牧野 剛 特別研究員

わたしの近況

木村 敏



ここ1年あまり前から心身の状態がすこぶるよくない。2013年の暮れに雪で滑つてころび、「頭蓋底骨折」という厄介な傷害を起こして、救急車で脳外科の病院に運ばれて入院した。奇跡的によくなくて退院したが、それ以来、脳のMRIを撮つてもらうと、前頭葉と側頭葉に出血の跡がある。歩行が不安定で、転ばないように歩くためには、これまでよりもうんと長い時間が必要になった。用心して歩いていてもすぐ転んで、困ったことに前のめりに転ぶので顔に怪我をする。

それと、やはりなんといっても、知的な衰えの有無が気になる。他人の書いた論文や本を理解する能力は（外国語も含めて）まだ大丈夫ではないかと思っているが、自分の考えを論文にまとめる力が衰えてきたのではないか。現在の自分の行動の方向づけがはつきり定まらない。自分が次に何を書くかとしているのか、その方向を決める能力、心理学用語でいうと「見当識」（オリエンテーション）がきちんと定まらない。自分がいま、全体の構想のどこに位置していて、どちらへ進もうとしているのかという座標上の立ち位置があやふやになることが多い。

そんな悪条件にもかかわらず、この数年間、結構たくさんさんの仕事をしてきた。させられてきた、と言ったほうがいいのかもしれない。文教研が毎年の暮れに東京で開催している「河合臨床哲学シンポジウム」では、2012年から3年連続でシンポジストをつとめ、その最初2回（2012年の「臨床の哲学」と2013年の「感性と悟性の統合としての自己の自己性」）は、文教研から隔年に出しているシンポジウム「臨床哲学の諸相」で論文化している。2014年には日本精神病理学会の第37回大会で「自他関係における現勢態と潜勢態」と題する特別講演をして、それを論文化したものを「臨床精神病理」誌に載せた。

著書としては、昨年『あいだと生命——臨床哲学

論文集』という本を、このところ私の書いたものをよく刊行してくれる創元社から出版した。これは私が最後に出した論文集「関係としての自己」（みすず書房2005年）以降に書き溜めた論文の中から、8篇を選んで論文集に仕立てたものである。論文集を出すとき、私はいつもかなり長い序論を書き下ろして、それを全体のマニフェストとすることにしている。今回は、2012年の西田哲学会で発表した「西田哲学と私の精神病理学」が内容的にそれに相応しいと思われたので、わざわざ書き下ろすことはしなかった。そこにも書いてあるとおり、私の精神病理学はそもそも最初から西田哲学との——そしてそれにいわば触発された形でウィクトーア・フォン・ヴァイツゼカーの心身論的な思想との——関係なしには語れない。

●プロフィール

木村 敏（きむら・びん

文教研所長・主任研究員

京都大学医学部卒。

専攻・精神医学、精神病理学。医学博士。

京都大学名誉教授。ドイツ精神神経学会およびドイツ存在分析学会特別会員。

精神医学と哲学をむすぶ観点から、「自己」や「生命」を考察し、「あいだ」理論を軸にした独自の自己論で内外に大きな衝撃を与え、近年は環境に相即する主体を核とした生命論を展開中。

1981年第3回シーボルト賞（ドイツ）、1985年第1回エグネル賞（スイス）、『木村敏著作集』第7巻が2002年度第15回和辻哲郎文化賞受賞、「精神医学から臨床哲学へ」（ミネルヴァ書房）が2010年度毎日出版文化賞受賞。2011年度京都府文化賞特別功労賞を受賞。

著書『時間と自己』『分裂病と他者』『偶然性の精神病理』『自己あいだ時間』『関係としての自己』『生命と現実』ほか多数。『木村敏著作集』全8巻。河合文化教育研究所からも『人と人とのあいだの病理』『からだ・こころ・生命』（河合フックレット）、『分裂病の詩と真実』、中村雄二郎氏との共同監修による思想年報『講座生命』全7巻、坂部恵氏との共同監修による臨床哲学シンポジウム『身体・気分・心』（「かたり」と「つくり」）野家啓一氏との共同監修による臨床哲学シンポジウム『空間と時間の病理』『自己』と『他者』『臨床哲学とは何か——臨床哲学の諸相』

第14回 河合臨床哲学シンポジウム 「生命——バイオとゾーエー——」

2014年12月14日



一瞬の映像をめぐって ——自らを犠牲にすること——

中川 久定

（一）

昨年（2014年）の4月16日、韓国の旅客船セウォル号が、目的地済州島（チェジュド）の港に到着する直前、珍島（チンド）沖で航路を変更しようとして急旋回したため、船体が傾き、沈没してしまった。元来、船体上部に無理な増築がなされていた上に、過積載で、かつ貨物の固定も不十分だったので、船の復元力が著しく低下していたのである。

この船には合計476名が乗船していたが、死者・行方不明者304名、生存者は172名だった。その中に、修学旅行中の女子高校生325名が乗っていたが、死者・行方不明者250名で生存者はわずか75名だった。

私はテレビでこの時の状況を見ていたが、その中に、船が沈む直前、誰かが携帯で撮った2人の女子生徒が映し出されていた。後ろの1人は上級生、前の1人は下級生。背後の上級生がその場で自分の体から脱いだ救命胴衣を、すぐ前の下級生に着せようとしていた。

見たとたん、私の両眼から涙があふれ出してきた。年長の生徒が、自分が溺れ死ぬとしても、年下の生徒を助けようとしていたことは明らかであった。人間がなしうる行為のうちで、これ以上崇高なものがありうるだろうか。他方、セウォル号の船長が、制服を脱いで一般人を装い、真っ先に船を脱出しようとしている映像も写されていて、やりきれない思いをした。だが、卑怯な人間もいれば、このように崇高な人間もいるのである。

（二）

これもまた、昔テレビで偶然に一度だけ目にした映像がある。先の第2次世界大戦中、ナチスによってユダヤ人が大量に虐殺されていた時代のことである。

ある強制収容所で、2人の子ども（小学校1年生か2年生に見えた）を自分の両脇に抱きかかえるようにして立っている神父がいた（確かコルベという名前だったと思う）。彼は、恐怖で震えている子どもをしっかりと支えながら、怖がることはない、私がずっと傍にいるのだから、と、言葉と態度で示していた。純粹にドイツ人であり、いささかも身に危険のなかったコルベ神父は、こうしてユダヤ人の2人の少年と一緒にガス室に入って死んでいったのである。

（三）

人間は複雑な存在であるから、時には卑劣な面を見せることもあるであろう。しかし逆に、崇高な、あるいは神聖な顔を見せることもあるのである。この多面性は、例えば、ドストエフスキーの小説『カラマゾフの兄弟』が、あますところなく書ききっている。

歴史的事実に関する主題に、フィクションを扱う小説家の立場を混ざっていることに違和感を持たれるかもしれない。しかし、心理分析家ドストエフスキーの洞察力は、しばしば普通の人間の考えを遥かに超えている。このロシアの小説家の登場人物たちは、私たちと交友関係にある誰々よりも、はるかに実在性を感じさせるのであるから。



●プロフィール

中川 久定（なかがわ・ひさやす）

文教研主任研究員。

京都大学文学部仏文学科卒。

専攻・フランス文学史・思想史。文学博士。

京都大学名誉教授。日本学士院会員。

元京都国立博物館館長。元国際高等研究所副所長。元国際18世紀学会副会長。

国際18世紀研究センター学術委員（フランス、フェルネ＝ヴォルテール）。

研究誌『ディドロ・百科全書研究』（フランス）査読委員、研究誌『ディドロ研究』（カナダ）評議会委員。

18世紀フランス文学・思想の実証的比較分析を行っている。「自伝」にこだわ

り、塾生や若いひとたちに向けた文章

は、常に自己の生の軌跡、体験と重ねて語っている。1976年辰野賞（日本フランス語フランス文学会）、1986年ハルム・アカデミック勲章オフィシエ級（フランス）、1993年京都新聞文化賞、2001年勲2等瑞宝章、2004年レジオン・ドヌール勲章シュヴァリエ級（フランス）、2007年京都府文化賞特別功労賞受賞。

著書：『自伝の文学——ルソーとスタンダー——』『ディドロの『セネカ論』——初版と第2版とに表現された著者の意識の構造に関する考察——』『甦るルソー——深層の読解——』『ディドロ』、『啓蒙の世紀の光のもとで——ディドロと『百科全書』——』『転倒の島——18世紀フランス文学史の諸断面——』、河合文化教育研究所からも『ディドロの（現代性）』（河合フックレット）、J・シュローバ氏との共同編著で18世紀国際シンポジウム論集の日本語訳『18世紀における他者のイメージ』を刊行。[L'image de l'autre vue d'Asie et d'Europe] (ed.par H.Nakagawa et J.Schlobach)、[Memoires d'un «moraliste passable»] S・カルプ編 中川久定・増田真監訳『十八世紀研究者の仕事——知的自伝——』

（ある時期以降は、すべての著書を、フランス人ならびに欧米の読者に読んでもらい公正な評価をえるために、フランス語で執筆している）

Des Lumières et du comparatisme, Presses Universitaires de France, Paris, 1992 / Introduction à la culture japonaise, Presses Universitaires de France, Paris, 2005（スペイン語訳、バルセロナ、Melusina, 2006年；イタリア語訳、ミラノ、Montadori, 2006年；ポルトガル語訳、サン・パウロ、Martins, 2008年） / Mémoires d'un «moraliste passable», Centre international d'étude du XVIIIe siècle, Fernay-Voltaire, 2007 / L'Esprit des Lumières en France et au Japon, Champion, Paris（7月に刊行予定）。

来しかた行く末

渡辺 京二



六十代になってから私は三つ大きな物語を書いた。『逝きし世の面影』『黒船前夜』『パレレンの世紀』である。『パレレンの世紀』はまだ連載中だがもう峠は越えていて、あと一年以内で完結するはずだ。『逝きし世の面影』の副産物というべき本も二冊書いた。『日本近世の起源』と『江戸という幻景』である。

考えてみれば、以上はみんな日本近代とは何かという関心が生んだ序説だった。日本の近代については、それ以前に『評伝宮崎滔天』『北一輝』『日本コミュニン主義の系譜』といった本で、粗いアイデアだけは出していた。もっと考えを詰めるためには、時代を遡らねばならず、それが六十代以降の仕事となった。さてもう一度、本来の課題たる日本近代に立ち帰るべき時が来たいま、私はもう八四歳になっていて、目はかすむ、記憶はボケる、腰は立たぬという有様で、年来の課題たる「開国」物語が書けるかどうか、まことに心許ない。文献はもう集めてある。ある程度読みこんでもいる。

近く完結する『パレレンの世紀』で扱ったのは、日本の西洋との最初の出会ひ、つまりファースト・コンタクトである。だとすれば幕末の「開国」はセカンド・コンタクトで、これを書かねば浮かばれぬ気がしないでもない。しかし、来春、またもや大きな物語にとりかかる気力が残っているかどうか。

それにもうひとつ。私は十代から西洋文学に養われてきた人間なのに、気づいてみればまだジョージ・エリオットもヘンリー・ジェイムズも主要作を読み残しているのだ。エリオットはわずか『ミドルマーチ』と『サイラス・マーナー』しか読んでいない。エリオットとジェイムズは例を挙げただけで、ほかにも読み残している作家は沢山あって、訳本だけはいろいろ買いこんでいるのに、死ぬまで果たして読み了えられるかどうかがいまや問題となって

来た。

実は読むだけでなく書きたい。少なくとも、シェイクスピアとチェスタートンとオーウェルについては何か書いておきたい。文芸評論家でも外国文学研究者でもなくせに、そんなもの書いてどうすると言われても、素人だから却って楽に書けるといふことはある。だが書くともなれば、うろおぼえに頼るわけにはいかぬから、また読み直さねばならぬ。読む方の力はまだ保たれている。それにしても西洋文学という奴は実に叙述がくどく執拗で、体力を消耗することおびただし。何でこんな労働を強いられるのか。読むことと書くことに呪われた一生だったのか。

近況報告といえ以上のような次第で、われながら滑稽という気がする。といっても本人としては泣き笑いのつもりだ。

●プロフィール

渡辺 京二（わたなべ きょうじ）

文教研主任研究員。
法政大学社会学部卒。
日本近代思想史家。思想家。評論家。
あり得べきも一つの日本近代を背景にした独自の視角からの日本近代論。近代思想史家論で著名。一貫して在野の研究者として生きる。
幕末明治期の数多くの海外文献を精査して著した『逝きし世の面影』が、近代以前の日本のイメージを一新させたといつことで多大な衝撃を世に与えたのは記憶に新しい。1999年度第12回和辻哲郎文化賞受賞。2010年、これまで解明されてこなかった明治維新前夜の北方史を、ロシアと先住民アイヌ、日本の三者が持った異文化接触のエピソードを通して初めて活写した『黒船前夜―ロシア・アイヌ・日本の三国志』が刊行。大きな注目を集めた。2010年第37回大佛次郎賞を受賞。
河合塾福岡校で1981年より2006年までの25年間現代文科講師をつとめる。

ここ数年、新刊や著書の復刊が続いている。また多くのインタビュー記事も新聞や雑誌に掲載され、年間11冊も出版された2012年夏には「文教研の菜」で特集を組んだ。
著書…熊本県人 日本人国記「小さなものの死 渡辺京二評論集」「評伝宮崎滔天」「神風連とその時代」「北一輝」「日本コミュニン主義の系譜 渡辺京二評論集」「地方という鏡」「私の世界文学案内 物語の隠れた小径へ」「ことばの射程」「なぜいま人類史か」「逝きし世の面影」「日本近代の逆説―渡辺京二評論集成Ⅰ」「新編 小さなものの死―渡辺京二評論集成Ⅱ」「荒野に立つ虹―渡辺京二評論集成Ⅲ」「隠れた小径―渡辺京二評論集成Ⅳ」「日本近世の起源―戦国乱世から徳川の平和へ」「江戸という幻景」「アーリーモタンの夢」「黒船前夜―ロシア・アイヌ・日本の三国志」「渡辺京二コレクション（1）史論 維新の夢」「渡辺京二コレクション（2）民衆論 民衆という幻像」「未踏の野を過ぎて」「細部にやどる夢―私と西洋文学―」「熊本県人言説舎版」「ドストエフスキイの政治思想」「もつひとつのこの世―石牟礼道子の宇宙―『近代の呪い』『万象の訪れわが思索』『幻影の明治 名もなき人びとの肖像』『無名の人生』『気になる人』
共著…近代をどう超えるか―渡辺京二対談集』『女子学生、渡辺京二に会いに行く』『日本の国士 日本人にとってアジアとは何か』

私が考えてきたこと ―テストと採点について

牧野 剛



私には、ずっと長いあいだテストの採点について「気になること」があった。その最初は、遠く小学生のころに、学校でやったテストの答案用紙を返してもらったときの「ふーん」という感覚にまで遡る。テストを返してもらうときに、自分の点数のことよりも、教師がつけた「採点の仕方」の方が気になったのである。採点を見て、子どもながら、「こんな〇×だけの点のつけ方ではぜんぜん面白くないな」という素朴な感じを抱いたのがはじまりであった。

私は岐阜県恵那で小学、中学、高校の子ども時代をすべてを送ったが、そこは戦後の生活綴方教育運動の高揚など、ある時期、つまり私が子どもだったころ、「恵那方式」という戦後日本の教育運動と教育実践に実験的な意味を持った特別の地域であった。民主教育に燃えた共産党系の革新的な教師がたぐさんいた。彼らは、「民主的な新しい教育」をめざしてはいたが、テストの答えに子どもにありがちな「はみ出した解答や独創的な解答」は認めず、ともかく彼らの考える模範解答だけを〇にし、あとのすべてに×を機械的につけていたのである。それが幼い子どもにも、「こんなことでいいの、面白くないなあ」という漠然とした疑問をもたせたのである。自分が何を期待していたかはわからないが、返してもらった答案用紙に、アッと驚くことや学ぶことがなにもなく、なにかつるつるしたつまらない印象があった。

それからというものは、国語でも算数でもテストでは単に教科書どおりの正しい答を書くのではなく、何でもいいからともかく教師が期待するものとは絶対違う形で自分の答を書くことと思いついた。0点しかもたえなくてもいいから、子どもながらに自分の独自性を出そうとしたのである。使命感を持

った教師から見れば、扱いにくいひねくれた子どもだったと思う。実際それ以後、高校卒業までの12年間、彼ら「民主的」な教師とことごとく対決していくのが、私の学校生活の大きな課題となった。彼らの民主教育の中身とその欺瞞を暴いたり逆に教師から反撃されたりするという、学校での緊張関係の中で、私はさまざまに鍛えられたのである。

本来、テストの解答は〇×だけで決まるはずのものではない。正解の〇はともかく、×の方にはさまざまな豊かな答えと段階があるはずである。×といつてもその中には、半分〇、△△、△マイナスなどさまざまな程度や幅があるのである。ほぼ正解なのにすこしだけ勘違いのある解答、問題の意味はわかっているけど間違ってしまった解答、半分くらいしか問題がわからなくても一生懸命解こうとした努力のあとのある解答、初めからまったくわかっていない解答など、その幅は広いはずである。にもかかわらず、これが全部同じ×になるのでは、試験を受ける子どもは具体的な学力は測れないのではないから。これは学力を測るというテストの本来の目的からしても非合理的なことである。ここをなんとかしなければいけないのではないか。私はずっとそう思ってきた。採点が、〇と×だけなら採点者はたしかに簡単だが、それは真に学力を測り、子どもたちの力を伸ばすことにはならないのだ。

×の採点が、もし幅を持った多様なものに変れば、試験を受ける子どももどこで自分がつまづいたか、なぜここまでできなかったのか、という間違いの段階がわかるようになる。そうして、自分のいまいる位置が測れば、次の試験に向けて何をしたらよいか自分で変化することができるのである。教育とは、端的にいえば、子どもが変化することがすべてである。いかに「自分の可能性の井戸」を掘り当てるか、そしてそこから自分の力を汲み上げられるか。それはテストにおいても同じである。もし採点方法が柔軟で幅のあるものになれば、変化は見えてくるはずである。そして採点のつけ方がこのように変化するなら、おのずとテスト問題の変化にもつながると思う。

私自身は、文科省が今のセンター試験を改めて2021年ごろに打ち出そうとしているいわゆる「新テスト」について、いろいろ考えている。また文科省に先がけて、「新テスト」のモデル問題を知り合いの先生方に頼んで作ってもらったりもしている。

だが、これには問題作成からのアプローチだけでなく、採点方法からのアプローチも必要だと気がついたのである。新テストは論述問題だから、いままでのように〇×式ではない。したがって、どうやって答えに到達するかということを自分流に考えることが重要である。

ここから何が考えられるか。100点満点のテストの最低点はもちろん0点である。

だとしても、このテストの真ん中は50点ということにはならない。33点や43点ということもある。問題は、横並びでの「相対評価」ではなく、「縦の評価」、つまり自分の中でどう変われたか、この場合で言えば、「1点ずつでも点をあげてくる」ことができたかどうか」という自分の歴史のなかでの評価の問題にかかっているのである。

●プロフィール

牧野 剛（まきの つよし）

文教研特別研究員。
名古屋大学文学部国史科卒業。私塾、養護学校教諭、高等学校教諭などさまざまな教育現場を経て、1976年より河合塾国語科専任講師として予備校の教壇に立つ。元国語科、小論文科主任。2013年より現職。

河合塾の数々のイベント・シンポジウムを企画し、実現してきた。特に「日本・中国・韓国」三国の大学入試統一テストを比較分析し、衛星放送を通じて討論した番組は東アジア各国の特徴が見られ、先駆的であり、話題となった。
学生運動・市民運動の中心を担い、社会の矛盾を問い続けてきた姿勢が、その予備校教育に生きており、30年にわたって多くの予備校生、高校生に絶大な支持を得てきた。

1984年の「全国共通一次試験」の国語問題（藤田省三『精神史的考察』をスバリの中させ、大きな話題になる。その後、東大、京大の出題問題も的中させている。大阪校、福岡校、仙台校などを提案し、河合塾の全国体制の基礎作りに貢献。その全国展開に伴って、全国模試の体制、ベシック（低学力）コース、コスモ（大校）コース、サテライト（衛星）授業の設立なども提案、実現してきた。また、カンボジア学校支援も行ってきた。文教研では、2010年に「わたしが選んだこの一冊」という推薦図書の発行を提案し、現在2015年版まで6冊が出され、主任研究員、河合塾の講師が執筆して大きな反響を呼んでいる。

当たり前と思っていたことを根本からひっくり返す革命的とも言える着想から、マスコミを通して日本の若者文化や教育問題について積極的に発言してきた。文教研設立の基盤を作り、それぞれの分野で屹立した思想家や研究者を主任研究員として招聘した。
河合ブックレットの解説も書いている。

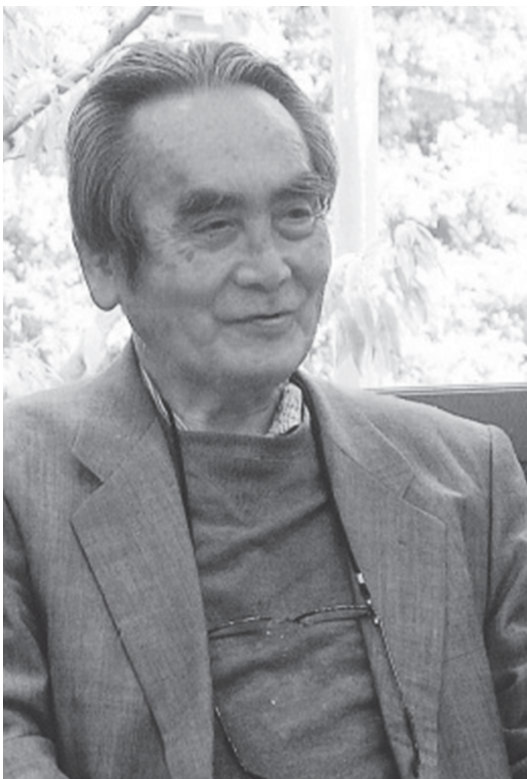
『テイドロの八現代性』中川久定、
『世紀末世界をどう生きるか―「新右翼」の立場から』鈴木邦男、
『グレートジャーニー2001年 地球の旅』関野吉晴。

著書…予備校にあつ『されど予備校 予備校から世界を覗く』『偏差値崩壊―本当の学力を見失う偏差値（くらべっこ）の呪い』『人生を変える大人の読書術』ほか。

共著…国境を越えて―東欧民主化とEC統一の若者への旅―鎌田慧、『現代文と格闘する』竹田友康、前中昭

特集 ―生物学シンポジウム―

長野敬主任研究員の主導のもと「生命の再生現象」をテーマに、河合文化教育研究所主催の理系シンポジウムを新しく企画。



長野 敬

今年は「ひつじ年」ということから、かつて「ドリー・ヒツジ」がNature誌のカバー・ストーリーになったのを探しだして、年賀状の図柄に配した。雌ヒツジ成体Aの乳腺から取り出した細胞を、培養して受精初期の状態にして、その細胞核を、べつの未受精卵に移植し、これを仮母親となる雌ヒツジBの体内で育てたものがドリーで、これは遺伝子構成がAと同じの、いわゆる「クローン」である。誕生は1996年の夏で、論文の掲載は翌67年2月だった。

それからすでに20年ちかくが経過して、生命に特有の生まれる、育つなど――ひろく生殖や発生と言われる分野では、目ざましい展開が進んでいる。農業などのバイオテクノロジー、そして医学の分野では医療の新しい方向が開けている。とりわけ新しい医療の方向性として筆頭に挙げられるのは、周知のips細胞だろう（名付け親は2012年ノーベル賞受賞の山中伸弥京大教授）。Sは「幹細胞(stemcell)」を意味している。未分化の細胞から筋肉、神経、血球など全身の構成部品に分かれ、特殊化してゆく「分化」の出発点になるのが、幹細胞である。受精直後の卵は完全な幹細胞であり、個体発生が進むにつれて、細胞が分化の進んだものになってゆくの、正常な姿だ。

(1) 個体発生の経過では細胞は未分化→分化へと進行する。(2) ips細胞では、成体で分化してしまったたとえば皮膚の細胞を取ってきて、特別の4種類の遺伝子を与えると、それが初期の未分化状態に戻すことができ、その後に適当な処理を施すことによって再度、目指す医療目的に使える細胞へと再分化させられる。(3) 自然界での再生過程でも、トカゲの尾でそれなりに分化していた細胞が、切断をきっかけとしていったん未分化へと若返り、再度尾の部分の分化した細胞になってゆく。

こう考えると、未分化から分化へということを鍵として、いま医療にも利用が試みられはじめた「幹細胞」と、自然界での再生過程と、さらに有性生殖の進行一般を、同じ目線で捉えることができるのではない。こうした趣旨で解説的な入門向けの小シンポジウムを、いま計画している。



●プロフィール

長野 敬 (ながの・けい)

文教研主任研究員。
東京大学理学部植物学科卒。
専攻・生物学。医学博士。自治医科大学名誉教授。

細胞膜のイオン輸送酵素の遺伝子構造を決定し世界の遺伝子研究に先鞭をつける。細胞から生態系まで生物学をシステムの観点から統一に見る独自の方法論をとる。現在はこの方法論の延長上で「生命研究を教育の中で多面的に正しく理解させる」ことをテーマに研究中。

生命、進化、遺伝関連の海外出版物の多くの翻訳者と知られている。最初の翻訳書『生命生体論の考察』ベルタランフィ飯島衛共訳『歴史における科学』J・D・バーナール 鎮目恭夫共訳（いずれもみすず書房）は1954年の出版で、60年間におよそ100冊の翻訳書がある。

著書：『生物学の旗手たち』『科学的方法とは何か』『変容する生物学』『進化論のらせん階段』『生体の調節』『生命の起源論争』『生命現象と調節』『細胞のしくみ』『ウィルスのしくみと不思議』、他に共著、翻訳書など多数

長野先生にシンポジウムのテーマに添った図書を紹介していただきました。



◇『捏造の科学者——STAP細胞事件』須田桃子 文藝春秋 2015年

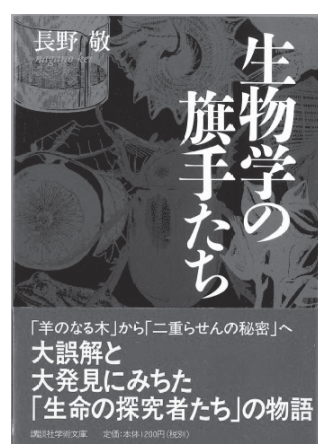
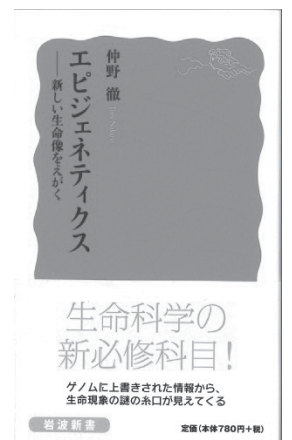
「近況」にも入門的な小シンポを計画中と書いた。これを企画した一つのきっかけは、1年前に突発した「STAP細胞事件」にあった。全国の報道を巻きこんだこのつむじ風に巻きこまれたことは、弁解の必要はないだろう。難解な理論などでなく事実としていきなり報告されれば、最初の反応として、その通りに受け入れて「すごいですね」と言うほかない。お膝もとの京大でiPS細胞の生みの親、いまでも研究の中心人物である山中京大教授も、最初の意見は、「本当ならばたいへん有望な突破口」というものだった。これが「本当」でなかったことは、引き続いて明らかになって、その経緯は興味本位の報道の餌食になった。ただしこの本は、そうした読み捨て情報でなく、最初からかかわってきた本流の科学記者が一件顛末を、最後は「事件」に巻き込まれる形となった笹井教授（山中教授の同僚、そして競合相手でもあった）の自殺まで、しっかりあとを追ひ、記録したもの。

STAP細胞はやっぱり、「あります」などの幻想を抱く対象ではない。いま予定しているシンポでも、「事件」を取り上げるつもりはない。それでも細胞の未分化から→分化への動きは、世代ごとに当然のこととして何億回も繰り返されてきたのは「事実」なので、反復をどんな瞬間でとらえ、医療にも応用してゆくかは、「事件」が落着いた今後も生物医学技術の腕前にかかっている。

◇『エピジェネティクス——新しい生命像をえがく』仲野徹 岩波新書 2014年

卵の受精から、細胞の分化につれて個体の完成までの経過が「世代ごとに当然のこととして」繰り返されてきたことは、上にも書いた。事実はその通りだとしても、未分化→分化の仕組みの「どのようにして」を、遺伝子と関連づけて語れるようになったのはほぼこの10年ほどのことだ。受精のさいには、両親の遺伝子のひと揃い(ゲノム)が受精卵に持ちこまれる。発生が進むにつれて、ゲノム全体のうちから一部分づつが違う細胞で機能を発揮するのだらうという大まかな見通しは、ずっと抱かれていたのだが、具体的な仕組みの筋書きが見えてきたのだ。遺伝子(ジーン)自体の作用(ジェネティクス)でなく、世代ごとに手直しを受けた「のちの」作用ということで、エピジェネティクスという呼びかたが登場してきた。

特徴のある現象の一つに、遺伝子の「メチル化」がある。DNAの4種類の単位ヌクレオチド塩基のうち、シトシン(C)にメチル基が結合すると、その部分が不活性、つまり細胞の分化に必要な仕事に役立たなくなるのだ。この新書は、現状を案内してくれる手頃な入門書となるが、全身の部位ごとの細胞でメチル化の反応を指令しているものは何かということ一つをとっても、本格的な理解はこれから。すでに挙げられた成果と今後の宿題の両方にとって、本書は手頃な案内書となっている。



◇『生物学の旗手たち』長野敬 講談社学術文庫 2002年

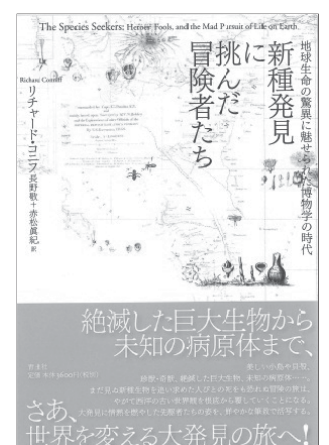
現代生物学先端では、エピジェネティクスのように、これからの大きな展開で一翼をになうと期待されるものもあり、これと関係はふかい分野だが、勇み足によって、世間を騒がせた「事件」を引き起こすものでしかなかった STAP(これは元来、完全な幹細胞が得られるとされた処理を指していたので、世間に流布してしまったSTAP「細胞」という言い方は、おかしいのだが)の成功をとえた研究者のような例も見られ、とにかく賑やかなことで、20世紀後半が二重らせんの成功で沸き立って生物学の時代と言われたのとべつの意味というよりも本来の意味で、21世紀は生命科学の時代と呼べるだろう。

しかしその賑やかさに隠されてしまいがちになるが、生物学の開祖であるアリストテレスから20世紀の初頭あたりまでにも、仕事を積みかさねてきた多数の人がいた。ダーウィンなどは別格としても、メンデルが数十年のタイム・ラグで現代の遺伝学に接続して名前が残るような幸運もある。ともかくどの人物も個性的で面白い。生物学の進行のなかで、そうした人たちが掲げていた目立つ旗じるしを横から眺めることで、生物学に新しい興味も見出されるのではないかという思いから書いたもので、ここの何倍もの人たちを、取り上げればよかったと思いながら、そのままになったのは、果たせなかった宿題ということになりそうだ。

◇『新種発見に挑んだ冒険者たち』リチャード・コニフ(長野敬+赤松眞紀 訳) 青土社 2012年

これも科学史の本だが、量質ともに自分の書いた文庫本と並べて挙げるのが気が引けるような迫力。訳者あとがきに「種の研究における外史列伝」と記した。種の発見に熱中する変人の銘々伝とも言える。フランスの宣教師アルマン・ダヴィッドは19世紀後期に中国で布教活動と種の発見に専心し、パンダの学名に命名者として名前を残している(この黑白熊の種小名はメラノウカで、メラノは黒、レウカはロイコつまり白)。最初は敷物の毛皮パンダを見て、つぎに生きた成獣も手に入れた。「胃が木の葉で一杯」なことも記しているから、死獣を解剖したのだらうが、そのことには記述がない。べつに隠すつもりでなく、保護とか動物生命の尊重などは関心外らしかった。新種の発見は、創造主をたたえる追加の寄与を自分も果たしたという意味でのみ、彼に喜びをもたらしたのだらう。

大銀行家の嫡男のウォルター・ロスチャイルドも列伝の一人で、銀行の家系からは記載が省かれ、その蒐集はそっくり、あるいきさつでアメリカ自然史博物館の手に渡った。しかし伝記を書いたメリアム・ロスチャイルドは、一族の銀行家たちが紳士録に載せられただけで忘却のかたに震んでしまうのに、ウォルターは多くの新種のうちに名前をとどめていると評している。生物相手のこういう「文化的」な活動が、経済や政治よりも結局は後世に残るという読後感が、本書や上記『旗手たち』から得られればと思う。



生物学シンポジウム 生命機能における再生の現代像

日時	会場	挨拶	講演
7月5日(日) 15:00～18:00	河合塾麹町校デルファイホール	長野 敬 (河合文化教育研究所主任研究員)	仲野 徹 (大阪大学大学院生命機能研究科、教授)
			杉山 宗隆 (東京大学大学院理学系研究科附属植物園、准教授)

プログラム

- 15:00～ 長野 敬【挨拶】
遺伝学の辿った道【導入】
――生命の驚異から、分子の仕組みへ
- 15:20～ 仲野 徹【講演】
エピジェネティクスとは？
――動物における生殖とリプログラミング
- 16:20～ 杉山 宗隆【講演】
再生しやすさの理解を目指して
――植物からのアプローチ
- 17:20～ 質疑応答